
不良神父に転生しました

らくだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良神父に転生しました

【Nコード】

N1842Z

【作者名】

らくだ

【あらすじ】

これは終わってから始まる物語。

1 (前書き)

※この小説は、中二病、ご都合主義を多分に含みます。

ステイル・マグヌスは転生者だ。

元は日本で高校生をしていた彼は、自身が死んだ記憶もないのに気が付くと赤ん坊になっていて、ステイル・マグヌスという別人へと生まれ変わっていたのである。

彼は当然混乱した。

身に覚えのない景色。原因不明の生まれ変わり。そして、何よりも自身の名前が、「ステイル・マグヌス」だったことに。

「ステイルⅡマグヌス」とは、彼が愛読していた小説の中に出てくる登場人物の一人で、決して現実にある筈のない名前である。それが、何故か自身の存在を指し示す名前になっている。しかも、ステイル・マグヌスは魔術師の家に生まれた子供で、彼もまた魔術を扱う素養を持っていた。魔術なんて小説の中だけに存在する物で、実在する筈がないのにだ。

可笑しい。これは夢だ。現実なんかじゃない。そんなわけがないのだ。彼は苦悩した。いくら時間が経とうとも決して覚めることのない現実に。

マグヌス家は、ルーン魔術を極める一族。そして、同時に「火」の属性を持つ一族だった。何もかもが重なっていた。一人の少女を救う為に、全てを懸けたあの人と。

転生したと認識してから一年の時間が過ぎる。

怪我をするとちゃんと血が出て、痛みを感じた。日常の何気ない瞬間に心が癒される。そのような要因が重なり合って、彼はとうとう今の現実を夢だと思えなくなってしまう。そして、同時に認めざるを得なくなった。この世界が、「とある魔術の禁書目録」の世界であり、自身が「ステイルⅡマグヌス」であることを。

信じたくない現実も諦めて認めてしまえば、後は簡単だった。今

までの死人のようにして過ごして無駄にした時間を取り戻すべく、彼は意欲的に物事に取り組み始める。その中で、特に顕著だったのが、魔術だ。小説の中だけの存在でしかなかったそれは、彼を大いに魅了した。それ以外の物事を放棄して、毎日ただひたすらに魔術だけを極めていく程に。

彼に魔術的な才能は特別なかったが、幸いなことに才能がないわけでも無かった。受験戦争を耐え抜いた精神力と魔術への情熱、そして物事をまるで乾いたスポンジのように吸収する子供時代特有の柔らかな脳みそもあってことが功を奏して、魔術を学び始めて5年。彼は現存するルーン24文字の完全な解析を終えることが出来た。

ほぼ同時期、現代当主である父、オラウス・マグヌスからマグヌス家に伝わる魔術をも学び終えた彼は、僅か8歳にして魔術の総本山である時計塔への入学する。全ては、更なる魔術の習得の為。彼はどこまでも貪欲だった。

それから5年後、彼は目論見通りに新たなルーン文字を6つも生み出すことにも成功し、目標とする「ステイルⅡマグヌス」と同様の技術を手に入れた。これでインデックスを守ることが出来る。そう思った彼は、いつ彼女と出会っても良いように容姿を「ステイルⅡマグヌス」へと近づけ始める。

未だ13歳であることから、180cmしかない背丈は仕方がないとしても、幼馴染に綺麗だと褒められた金色の髪を赤く染め、大量のピアスを身に付け、右目の下にバーコードの刺青を掘った。更には煙草を吸い始め、香水を付け、神父服まで用意した。

だが、いくら魔術の家に生まれたステイルといえど、コスプレのような神父服を常に身に纏うことは流石に恥ずかしく、まだ物語が始まるまで時間があると自分自身に言い訳をして、神父服だけは偶に着る程度の抑えた。もっとも、彼の居る場所は日本ではなくイギリスであり、それも魔術の総本山のような場所であるのだから、見

た目が完全にイギリス人のそれである彼が神父服を着ることはなんら恥ずかしいことでは無いのだが、そこは中身は日本人である彼にしか分からぬ葛藤である。

髪を染めることや、ピアスを付けることは許容出来ても、神父服を着ることは彼にとってコスプレしか思えなかったのだ。

真面目で優等生タイプのステイル・マグヌスの突然の変貌は、当然のことながら時計塔でも話題となった。特に仲の良かった幼馴染には猛烈に反対された。まあ、当然と言えば当然の反応である。真面目で生徒の鏡のような純粹な（に見えた）少年が翌日学校に来て不良化していたら、何かあったのではないかと考えるのが普通だろう。彼の真面目な（に見えた）イメージと正反対の容姿は、名家のご子息が集まる学園では総じて受けが悪かった。しかし、周りにどれだけ反対されようとも、彼はそれを変える気は無かった。

何故なら、彼が「ステイル・マグヌス」と同じような容姿にしたことは、これからの人生を「ステイル・マグヌス」として生きようとした彼の覚悟の証であり、また自身が消してしまった「ステイル・マグヌス」の姿をこの世に少しでも残そうとした結果でもあったからだ。

それがたとえ、「ステイル・マグヌス」への罪悪感、もしくは単純な憧れから来ていたとしても、彼の「ステイル・マグヌス」に対する畏敬の念は紛れもなく事実であり、誰が否定しようとそれは彼だけの大切な思いなのだ。

全ての準備を終え、後はインデックスと会うだけになったステイルは、彼でないステイルがあれ程までに愛した彼女と会う事を心待ちにしていた。

彼は、仮に自分が彼女を愛せなくとも、彼女の幸せの為に尽くそうと考えていた。その為に、力を付けたのだ。自身の存在意義は“そこ”にある。

しかし、ステイルが13歳になって半年が過ぎても、インデックスが彼の前に現れること一度たりともなかった。そのことに疑問を感じた彼は、迫りくる焦燥感と共にインデックスの事について自ら調べ始める。すると、信じられない事実が分かってしまった。この世界には、彼女が所属していたイギリス清教が存在しなかったのだ。イギリス清教がないのだから、当然のことながらインデックスも存在しない。まるで世界が終ったかのような絶望感が、彼を襲う。

そんな馬鹿な。この世界は「とある魔術の禁書目録」の世界ではなかったのか？ ……だとしたら、自分は一体何の為に生まれたのだ。何の為に「ステイル・マグヌス」になったのだ。

自分の存在意義が分からない。……もう、いつそのこと死んでしまおうか。

正常ではない精神状態でそんな事を考え始めながら、ステイルは、時計塔は歩く。しかし、本当の始まりは此処からだった。

自分自身に課した覚悟も、「ステイルⅡマグヌス」への思いも、彼女への忠誠も、全てを失いかけた直後、彼は知る。

この世界に生まれた意味を。

ステイルの耳に偶然入った、彼の運命を変えた話。

それは、若年ながらも時計塔での一級講師の地位についているロードⅡエルメロイが、極東の地で行われる魔術の競い合いに参加するというものであった。

極東の地で行われる魔術の競い合い……、彼はそれと似た話に覚えがあった。彼がステイルになる前の頃、大ヒットしていたアニメ、「Fate／Zero」という物語に出てくる、魔術師同士の殺し合いをテーマとした聖杯戦争だ。もし、それが事実だとするなら、この世界は……

そう思った矢先、ステイルの右手が突然光り始める。

なんだ？ 何処かの魔術師による攻撃か？ そう思った彼は、ル

インの書かれたカードを取り出して警戒するが、どこにも人為的な魔術の反応はない。

ステイルは、その奇妙な魔術を不気味に感じつつ、魔力を感じた自身の右手に何か異常がないかと調べようとして驚愕した。

右手の甲に描かれた、三匹の重なり合う紅いウルボロス。

それは確かに、聖杯戦争のマスターとしての証

「令呪」だった。

b e c o n t i n u e d . . .

t o

ステイルの右手に令呪が現れてから、半年。

彼は、日本の冬木市にいた。目的は勿論、聖杯戦争に参加するためだ。彼自身、願いなどはなく聖杯に興味はなかったが、自身の右手に令呪が宿ってしまった以上、それは仕方の無いことであった。敵前逃亡でもしようものなら、マグヌスの家名は地に落ち、彼自身も魔術師として表舞台で生きることが難しくなる。世話になった家の為にも、彼は聖杯戦争に参加しなくてはならなかった。

水銀で「消去の中に退去、退去の陣」を四つ、廃屋となったビルの床に刻んでいく。英霊を招くのは聖杯であり、そう大掛かりな儀式は必要としない為、後は召喚の陣で囲めばいいだけ。

本来なら、サーヴァントとなる英霊を指定して召喚しようとする場合、その対象となる英霊とゆかりの深い品を触媒を用いる。しかし、ステイルは今回敢えてそれを用意しなかったので、完全に運に頼ったサーヴァント召還になる。

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

呪文を唱えていく。

「閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 閉じよ。みたせ 繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

家の為と言ったが、実の所それは半分偽りである。

彼は自身の本心を決して表に出そうとはしなかったたので、周りの

人間は純粹にそう思っていたが、それは事実ではない。

彼には彼の、内に秘めた思いがあった。

それは、生きる意味を失った世界で、新たな生きる意味を得ること。

彼は、「ステイル・マグヌスとして生きて彼女を幸せにする」という自身の存在意義が変わる、新たな目的をこの聖杯戦争に求めたのだ。

「告げる――」

ステイル自身、聖杯戦争が危険な戦いであることは理解していた。一流の魔術師と彼らが呼び出した英霊達による、万物の願いをかなえる「聖杯」を奪い合う殺し合いだ。脆弱な魔術師である自分が、この戦いで勝ち抜けるなんて幻想は抱いていない。

というより、聖遺物のない召還を決意した時点で、既に生きてロンドンに帰ることすら諦めていた程だ。ステイルは、言峰綺礼のように戦闘能力に特化しているわけではなく、一般的な魔術師と同じように拠点防衛などの守りや待ちの戦いで真価を発揮するタイプである。そんな魔術師らしい魔術師である彼が、聖遺物に頼らずに運だけでサーヴァントを召還するというのは、自身の弱点である近接戦闘を強化するという点に於いて、最も愚かな行為に他ならない。

雨生龍之介や「Fate／stay night」の主人公である衛宮士郎ように、サーヴァント召還に関する知識を中途半端にしか持っていない、もしくは全くないのなら、それも未だ理解出来る。しかし、彼は違う。

ステイルの聖杯戦争への参加を知った家族や幼馴染は、聖遺物をちゃんと手配しようとしてくれた。それを、彼が断ったのだ。

自殺願望でも持っていなければ、正気を疑うような決断である。触媒無しで誰とも知らぬサーヴァントを召還するよりも、聖遺物を持って真名の分かっている英霊を召還する方が遥かに良い。第四次、

第五次聖杯戦争に参加した魔術師の全員が触媒を用意しての召還だったように、それは周知の事実である。

それなのに、触媒を用意できるだけの時間も金もコネも有りながら、敢えて触媒の無い召還を彼は選んだ。家族や幼馴染にもどんなに反対されても、その決断を変えようとはしなかった。

父には失望され、母には嘆かれ、幼馴染には激怒された。その判断で失った物は多数あれど、得た物は何一つない。

何故だ？ 何故そこまで、触媒の無い召還に拘るのか？ 自分自身に問うてみても、ステイルは今日まで明確な答えは得ることは出来なかった。

だが、こうしてサーヴァントの召還を前にして、彼は遂に答えを得た。

——信じたかった。

自分は、結局信じたかっただけなのだ。自身が「ステイル・マグヌス」として生まれた意味を。それは、きっとあると。ただ、サンタクロースの存在を信じる純粋な子供のように、信じてみたかっただけ。

その先に待っているものが、絶望でしか無いと分かっている。

「——告げる」

ステイルは、令呪の刻まれた右腕を魔法陣へ翳す。

「汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ——」

光り輝く、魔法陣。

もし、望むサーヴァントを得ることが出来ないとしても、それを受け入れる。それが、運命だと言うのなら、諦めて前に進むことが

出来る。だから――

「――誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者――」

聖杯よ。令呪を託した意味を教えてくれ。
生きる意味を、存在意義を、

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――」

『ステイル・マグヌスに与えてくれっ!!』

瞬間、魔法陣から光が爆ぜ、辺り一帯を白光が埋め尽くす。

「くっ」

余りの眩さに、ステイルは思わず目を瞑る。そして、同時に確信する。サーヴァント召還の成功を。実際に姿を見たわけではないが、確かな手応えがそこにはあった。

ゆっくりと、瞼を開く。

ぼやける視界の中、彼は確かにその目で見た。

“彼女”の姿を。

「……おなか……へった」

b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

3 (前書き)

※今回はウェイバー^{ほのぼの}回です。

3

「待てこらあああああ。この似非神父と似非シスターがあああああ
ああ!!」

「……くそっ、何故こんなことに」

「待てってってんだろがあああああ」

ステイルは走っていた。

第四次聖杯戦争の舞台となる、冬木の街。

自分でも何故こんな事になってしまったのか分からない。本来なら、早々に拠点である廃ビルへ引きこもって、自身の最も得意とする攻城戦に備えてる為、色々と準備をしている筈であったのに。

「ねえ、ステイル」

「はあああ……なんだい? ……インデックス」

その予定が見事に崩壊したのは、一時間前。

自身のサーヴァントである彼女が、どうしてもお腹一杯ご飯を食べたいと聞かないので、近くのレストランへ足を運んだことがきっかけであった。

自身に立てた誓いから彼女の頼みを無下に出来ない彼は、聖杯戦争の真っ只中に近接戦闘の手段を持たない自分達が無防備に外出する事がどんなに危険な事か理解していながら、彼女の上目遣いのお願いを承諾してしまったのである。

最も、それは誓いがどうのこうのというよりは、少女の可愛らしい上目遣いと彼女に嫌われたくないという気持ちからの判断であっ

たのだが……。早く早くと急かすインデックスに後を押されながら、最低限の手荷物だけを持って外出したステイルがそれに気付くことはなかった。

拠点を出て、近場のレストランへ向かうステイルとインデックス。お腹一杯ご飯を食べることが嬉しいのか、ごはんーごはんーと歌いながらスキップするインデックスを見て、つい頬が緩むステイル。

親子の団欒のような暖かな雰囲気が、そこにはあった。

しかし、ステイルは忘れていた。いや、この場合は、幸せ過ぎて頭が馬鹿になっていたという表現が的確だろうか。まあ、何でもいい。とにかく、ステイルは忘れていたのだ。

インデックスがただのシスターではなく、腹ペコシスターであったことを。

「どうして、あの人は怒ってるの？」

「そ、それは……」

ステイルはヨーロッパでも有数の名家に生まれた為に、お金に困った事が無い。自身の魔術の才能について悩むことはあっても、魔術で使う道具等の心配をする必要はなかった。カード一つで必要な物は買えたし、欲しい物は親に頼めば簡単に手に入ったから。そんな彼だったからこそ、次々に消えていく料理と共に自身の所持金を超えて積み上がっていく代金を見ようと、金が足りてないのならカードで支払えばいいと気軽に考えていた。ある意味で、お金持ちの家に生まれた故の弊害である。

だが、料金を支払う時になって、この店ではカードを扱っていないことが判明した。焦るステイルが見たカウンターに表示された額は、一万円オーバー。当然、ステイルには払えない。なら、どうするか。普通の魔術師なら、暗示を使って事なきを得るだろう。もしくは、

一般人と同様に事情を説明して近くの銀行へ行くだろう。しかし、彼はなんと店から逃げてしまった。お金に困るという、予想外の事態に気が動転してしまったのである。どんまい、ステイル。

「この食い逃げヤロオオオオオオオオオオ！！」

「……だからさ」

＊

あの後幸運にも銀行を見つけることが出来たステイルは、そこでお金を下して事無きを得た。

幸いにも店主が寛容であった為、食い逃げ同然の行為をステイル達がしたにも関わらず許して貰えたので、警察沙汰にはならなかったのだ。

流石、幸運EXを持つサーヴァントだけはある。ステイルは、原因が彼女であることも忘れてインデックスに感謝した。この幸運は、正しく彼女のお陰であると。まあ、間違っではない。正しくもないが。

拠点へと大量の食糧を買い込み戻ったステイル達。

インデックスは空腹を満たし、ステイルは何時もの冷静さを取り戻したところで、二人は此度の聖杯戦争に対する自分達が取るべく戦略について頭を悩ませていた。

ステイルとインデックスは共に、近接間での戦闘が得意なタイプではない。ステイルはまだ中距離の戦闘をこなせるが、インデックスに至っては完全な遠距離・補助タイプである。

彼らは自分達がこの聖杯戦争を勝ち抜くことがどれほど困難であるか、正しく理解していた。

近距離が得意であろう、セイバー、ランサー、バーサーカーに出会った時点で自分達は終わりである。細心の注意を持って、戦いに臨まなければならない。

「ごめんね、ステイル。私が弱いサーヴァントだから」

インデックスが申し訳なさそうにステイルへ言う。

彼女のステータスは、幸運と宝具のEXを除くと他の能力は全てE。しかも、唯一武器になりそうな宝具は彼女が何故か記憶喪失の為、全ては判明してない。分かっているのは、『歩く協会』と『魔道書図書館』の二つ。その内の一つ『歩く協会』は彼女の身を守る為の宝具だから、実質戦闘に使えるような宝具は『魔道書図書館』だけだ。

しかし、この『魔道書図書館』こそが鍵なのだとステイルは考えている。

10万3000冊の魔道書を記録したインデックスの頭脳は、聖杯戦争を勝ち抜く為の一筋の希望になるだろうと。この宝具でステイル自身を強化出来れば、自分達にも勝ち目は十分ある。

それに、インデックスだって魔力不足の為に大掛かりな魔術は使えないが、ほとんど魔力を消費しない補助的な魔術であれば使える。……なんだ。良く考えれば、こんなにも希望はあるじゃないか。

まだ、諦めるには早過ぎる。インデックスの「頭脳」と自分の「魔術」があれば、自分達は戦えるのだ。ステイルは、マイナ斯的に陥りがちな思考をプラスへと転じさせる。そう、まだ何も始まってないのだから。

「大丈夫だよ、インデックス」

ステイルは決心する。

サーヴァントが戦闘に特化していないのなら、自分がその代わりをすれば良いだけ。単純な事だ。インデックスが自分を守るのではなく、自分が彼女を守ればいいのだ。

「君は僕が守る。だから、君は僕を支えて欲しい。君の声援があれば、僕は何時だって最強になれるから」

「……ステイル」

ステイルは気付かない。

サーヴァントであるインデックスが、マスターに守ると宣言される事がどんなに悲しい事であるかを。

ステイルは気付かない。

無意識の内に、自身の命をインデックスの命より低く設定している事に。

ステイルは気付けない。

彼女が“それ”に気付いてしまった事に……。

b e c o n t i n u e d . . .

t o

廢ビルの一室。

ルーンの刻んだカードを至るところに配置することによって、一つの拠点へと成った場所。

「……」

使い魔によって御三家を監視していたステイルは、遠坂邸に配置した雀の目を通じて黄金の鎧を纏った金髪紅眼の男が仮面を被った黒ずくめの男を嬲り殺すのを自身の拠点から見ている。

投擲された宝具によってアサシンの頭部が一瞬の内に消し飛ばされる光景。

遠い昔に液晶の画面で見た映像と重なるそれは、ステイルにデジヤブのような感覚を味あわせた。そう、これは

「Fake」

聖杯戦争の始まりを告げた、アサシンの脱落。成程、確かにこれは“知らないのであれば”他の陣営が勘違いするのも無理はないだろう。アサシンが複数いるなんて、普通は考えない。サーヴァントは一人のマスターにつき一騎という原則の盲点を見事に突いた戦略である。流石、遠坂家当主。うっかりだけ取り柄というわけではないらしい。

「ステイル、お腹が減ったんだよっ」

「バナナでも食べてなさい」

「もぐ……もぐ……もつと食べたいんだよっ」

「……なん……だと」

にしても、使い魔を放っていて良かったとステイルは心の底から安堵する。この光景を見ていなければ、アサシンが複数存在することも、遠坂と教会が密かに手を組んでいることも思い出すことはなかった。ほとんど覚えていない「Fate／Zero」の内容であったが、このような形でまた一つ思い出せたことは非常に幸運である。

これも、彼女の御陰だろうか。

ステイルは、非常時に備えて用意していた食糧を勢いよく食べ尽くしているインデックスを見る。彼女の能力、幸運EX。彼の英雄王さえ超えるインデックスの幸運はそれだけで一つの宝具として威力を発揮していた。

「うん？」

ステイルの視線に気付いたのか、インデックスは缶詰の中身で口を膨らませたまま彼の方を見る。

「もぐ……もぐもぐ……だよ」

「……？」

口に食べ物を含んだまま喋っているの、インデックスの言葉はめちやくちゃだ。ほとんど、何を言っているのか分からない。ステイルは不思議そうな顔で彼女を見る。

「もぐもぐ……ごっくん」

ステイルの視線を受けたインデックスは自分の言葉が滅茶苦茶であつたことを理解したのか、少し頬を赤く染めつつ、口の中にあるものを呑み込んで言う。

「な、何かようなのって聞いてるんだよっ」

ステイルはそんな彼女を可愛らしいと思いつつ、少し苦笑いしながら彼女に言葉を返す。

「いや、なんでもないよ」

だが、ステイルの笑いに苦が含んでいることに気が付いたのか、インデックスはさらに顔を紅くして、彼に詰め寄る。

「むう。嘘っ。ステイルは嘘つきなんだよ！」

迫ってくるインデックスに、ステイルは慌てる。

「え？　ち、ちょっと、待って、インデックス。お、落ち着いてっ」

「イヤだ！」

だが、それをきっぱり断るインデックス。

「ええ！？　」

「ステイルはズルい子なんだよ！！」

「わ、分かった。分かったから、少し、落ち着いて」

既にキスが可能な距離まで二人は顔が近づいていた。ステイルは、インデックスの肩を優しく掴むことで密着した身体を離す。

「うゝ」

何がお気に召さないのか、唸るインデックス。

やがて、彼女は口を大きく開いて、彼に頭に噛み付いた。

「ステイルのバカアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

食うインデックスと食われるステイル。聖杯戦争は既に近いというのに、なんだか緊張感の無いと二人であった。

＊

「みったせー、みたせー、みったして、みたせー」

そこは、暗い部屋だった。

時計の針は既に9の文字を指そうというのに、部屋には大よそ灯りというものがテレビの光以外にない。

「繰り返すつどに四度……あれ？ 五度？ えーと、ただ満たされ

る刻を……破却する……」

意味不明の言葉の羅列を呟きながら、一人の青年が足で床に何かを描いていた。魔法陣のようなものだろうか？ 青年が描いているそれは、円の中に幾つもの文字があり、どこかサーヴァント召還の陣にも似ていた。

「みったせー、みたせー」

ぴちゃっ、ぴちゃっ、液体の跳ねるような音。

古文書を片手に持った彼は、それを確認するようにして言葉を続ける。

「みたしてみたして、みたせっと」

『――速報です。これまで起こった四件の殺害現場全てに』

「……ん？」

付けっぱなしにしていたテレビから漏れたアナウンサーの声に気が付いて、彼はテレビを見る。そこに、流れていたのは連続殺人事件の速報。ちょうどアナウンサーから専門家へ場面が切り替わるところであつた。

『この手の殺人はですね。警察に対して何らかのメッセージを』

「ふーん」

どうやら、この専門家という人間は事件の分析をしているらしい。

「なっ」

慌てて後ろを振り向いた彼の目に写ったのは、自身の描いた魔法陣から発生する青白い光。

それをバチバチっと音を立てると、大きな光に変わり、部屋を覆い尽くした。

そして、光が晴れていくのと同時に現れる一騎のサーヴァント。魔法陣の上に立っていた英霊は、青年を見てこう言った。

「問うぜ。お前が俺のマスターか？」

t o b e c o n t i n u e d . . .

4 (後書き)

M
e
r
r
y
C
h
r
i
s
t
m
a
s
♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1842z/>

不良神父に転生しました

2011年12月24日00時55分発行